フッサール現象学とダメット的反実在論

――富山豊『フッサール：志向性の哲学』についての一考察――

千葉　清史
（早稲田大学）

本論考で私は四つの論点を取り上げるが、それらは大なり小なり、検証主義的意味論ならびに真理観に関わる；そしてこれらはさらに、ダメット的反実在論の問題圏に連なる。富山 2023a（以下「『志向性の哲学』」と略記[1]）には「検証主義」や「ダメット的反実在論」への明示的な言及はまったく見られないとはいえ、富山氏の諸論稿に接してきた者にとって、この問題設定は意外なものではないだろう。例えば富山 2017（110 頁）でのフッサール解釈には「検証主義的真理観」ならびに「検証主義的意味論」への明示的な言及が見られるし、また富山 2023b では、本書とダメット的反実在論との関わりが積極的に強調されてすらいる。―― とはいえ、本論考で私は、まさにこの関わりについて疑義を呈ずることになるのだが。

本論考の議論は次のように進む：第 1 節では、『志向性の哲学』がフッサールに検証主義的意味論を帰さんとするものだ、とさしあたり想定した上で、特に 223-229 頁における説明の問題点を指摘する。

第 2 節で検討されるのは、『志向性の哲学』第三章第六節でフッサールに帰される「意味」の理論と検証主義的意味論との関係である。私は、そこで展開される「手続き主義的」説明は、とりたてて検証主義的意味論にコミットするものではないと論じる。

第 3 節で検討されるのは、『志向性の哲学』でたびたび強調される《「対象そのもの」への志向》という論点である。私は、この論点もまた、とりたてて検証主義的真理観にコミットするものではない、と論じる。それどころか、私の見立てでは、富山

1. 『志向性の哲学』を参照する際には、書名提示なしで頁数のみを示す。

氏の説明はむしろ、検証独立的真理観／ダメット的意味での実在論にこそより親和的なものである。

第 4 節では、『志向性の哲学』におけるカント的物自体に対する批判的コメントについて、まずカント哲学の立場から、物自体の想定はしばしば考えられるほど珍妙なものではないことを示す。その上で私は、富山流に理解されたフッサールはいずれにせよ物自体の想定を認めることになるのではないか、と論じる。

本論に入る前に、「検証主義的意味論」「検証主義的真理観」関連のキーワードについて最小限の説明をつけておきたい。

検証主義的意味論は、真理条件意味論に対するダメットの対案である。非常に大雑把な理解として、さしあたりは次の定式から始めよう：

真理条件的意味論：ある言明を理解している、とは、その真理条件を知っていることである。

検証主義的意味論：ある言明を理解している、とは、その検証条件（それがどうやって検証ないし反証されるか）を知っていることである。

実際のところ、検証主義的意味論のこの定式はあまりにも素朴で、（第 1 節で指摘されるように）即座に修正が必要となる。とはいえ、はじめから予防線を張ってあいまいにしておくような定式は理解を阻害するだけだろうから、さしあたり私はこの簡便な定式で始めることにする。

さて、ダメットによれば、真理条件的意味論は検証独立的真理観に、検証主義的意味論は検証主義的真理観に依拠する（富山 2017, 107 頁と 110 頁も参照）：

検証独立的真理観：言明は、それが検証ないし反証される、ということから全く独立に、真か偽に確定している。

検証主義的真理観：ある言明が真である、とは、それが検証される、あるいは検証可能だということである[2]。

2. 検証主義的真理観には、「検証される、あるいは検証可能だ」の部分の具体的な規定により、さまざまなヴァリアントがあり、またそれに応じて、各ヴァリアントは異なる強度の観念論的／主観主義的コミットメントを持つことになる。その詳細については Chiba 2012, ch.7 を参照されたい。

前者の伴立関係は問題なさそうだが、後者の伴立関係には議論の余地があるかもしれない（特に、検証主義的意味論を検証独立的真理観と組み合わせるような立場が可能なのかもしれない。）本論考で私はさしあたり、当該の意味論と真理観の伴立関係を自明視しない仕方でこれらの用語を用いることにする。

さて、上の二つの真理観はそれぞれ、次のような形而上学的／存在論的主張に帰着する（まさにそれゆえに、ダメット的意味での実在論論争は、実在論 vs.観念論という伝統的な対立に関わるものとなる）：

実在論的存在論：（係争クラスの；以下略）対象は我々の認識から独立に存在する。

観念論的存在論：対象の存在は、（何らかの意味で）我々の認識に依存する。

この伴立関係はいわゆる「同値テーゼ」（“*p*” is true iff *p*）による。この事情についてここでは、Chiba 2012, 18-9 頁における私の説明を繰り返すだけにしておこう：「[同値テーゼ]により、存在論的問題と真理観は次のようにして結びつけられる：ある対象が我々の認識から独立に存在し、またその諸性質を持つのであれば、その対象ならびにその性質についての言明もまた、我々の検証から独立に真であるはずだし、そして逆モマタ然リ」。

実際のところ私は、以上の説明で十分だと思っているのだが[3]、この最後の伴立関係は、（先に指摘された）意味論と真理観の伴立関係以上に問題的だと感じる方もいるかもしれない。ともあれ、真理条件的意味論－検証独立的真理観－実在論的存在論と、検証主義的意味論－検証主義的真理観－観念論的存在論との連関については概ね把握していただけたかと思う。そして（少なくとも私の理解では）前者の列がダメット的意味での実在論を、後者の列が反実在論を構成する。―― 以上の準備のもとで、本論を始めよう。

3. この点をご理解いただくためには、より詳細な説明を加えるよりも次のような例を挙げる方が効果的かもしれない：《言明「奇数の完全数が存在する」の真偽は検証独立的に確定している》という検証独立的真理観をとりながら、《奇数の完全数のような数は、あるかないかが認識独立的に決まっている》といった実在論的存在論を否定する、といった立場はおかしいだろう。そう思いませんか？

第１節　検証主義的意味論を具体化しようとする際の困難

まずは、『志向性の哲学』第四章第四節の 223-229 頁における議論の問題点を指摘することから始めたい。ここでは、検証主義的意味論の試みがすぐに逢着することになる次の典型的な問題が論じられている：ある言明を理解するとはその検証条件を知ることだ、という先のような検証主義的意味論の規定は、意味の理解のための要求としては明らかに強すぎる。例えば、「最大の双子素数のようなものは存在しない」ということはまだ証明も反証もされていない（ダメット業界の用語では「決定不可能言明」である）が、その理由をもって、この言明はまだ誰にも理解されていないと結論するとすればそれは法外なことだろう。さて、この言明の理解のために必要なのがその言明の具体的な証明ないし反証の知識ではないとすれば、それは一体何なのか？

富山氏の当該箇所での説明によれば、必要とされるのは「「どういうものであればその証明になるのか」という一般的枠組みを知っている」（226 頁）ことである。そして、この「一般定枠組み」の知識の例として挙げられるのは、（無限領域への量化を含む数学的言明の証明のためには）「いくつかの有限個の事例を調べただけでは足りない」ことや「数学的帰納法を用いて証明されれば十分なこと」を知っていることである（*ibid*.）。

さて、この説明の問題点の一つは、このようなことは、件の言明の理解のために検証主義的意味論が要求すべきこととしては明らかに弱すぎるということだ。というのも、この理屈でいけば、数学的帰納法を理解しさえすれば、それだけで、無限領域への量化を行なう自然数論上のすべての言明が理解されている、という奇妙なことになりかねないからである。検証主義的意味論にとって必要となるのは、それがどれだけ「薄められ」ようが、当該の言明の理解に特化した――この言明の理解の構成要素ではあるが例えばゴルトバッハの予想の構成要素にはならないような――検証条件についての知識でなければならないはずだろう。この点において、富山氏の件の説明は少なくとも不十分だ、と言えそうだ。

また逆に、数学的帰納法について知っている、というようなことは、件の言明の理解のための要求としては強すぎる（そのようなことは必要ですらない）と論じることもできそうである：最大の双子素数の存在であれ、ゴルトバッハの予想であれ、（証明済みではあるが）フェルマーの最終定理であれ、自然数に関する有名な予想・定理に特徴的なのは、それを理解するハードルが極めて低いということだ。例えば、ゴルトバッハの予想が言っていることは、なんなら小学校高学年生すら理解可能だろう。

その理解のために数学的帰納法についての知識が必要だ、というのは無茶な要求ではあるまいか？

ゴルトバッハの予想についての小学生の理解についての最も素朴でありがちな説明は、合成原理を用いた上で真理条件意味論に訴える、次のようなものだろう：子供はまず、「2 より大きい」「偶数」「素数」「和」といった語を理解する（これらの理解については、ダメットの表出論証をパスするような説明は容易に得られる）。次に子供は、これらの語を適切に組み合わせることで、「2 より大きい偶数は 2 つの素数の和である」という言明の意味を理解する；その意味として理解されるのは、2 より大きい偶数は二つの素数の和であるということ、すなわち、当該の言明の（検証独立的）真理条件にほかならない。—— このシンプルな説明で何が悪いのか？ なぜこれに加えて、検証の「一般的枠組み」の理解などというものが必要となるのか？

以上で提示された二つの疑問は、他人事ではない。これらは、ダメット的反実在論にシンパシーを感じる私自身もまた、取り組むべき問題である。今回、こうした点に気づかせていただいたということに関して、私は富山氏に感謝したい。

第 2 節 『志向性の哲学』と検証主義的意味論

本節で私が表明する疑念は次のものである：富山氏自身の哲学的スタンスや自己理解はともあれ、『志向性の哲学』で富山氏が展開した考察／議論そのものは、とりたてて検証主義的意味論にコミットするものではないのではないか？

そもそもの話、『志向性の哲学』で富山氏が表立って用いているのは、（例えば「習得論証」や「表出論証」といった）ダメットの検証主義的・反実在論的議論ではなく、彼のフレーゲ解釈である。そして、（ダメット読みには既知のはずだが）ダメットの判定では、フレーゲは実在論者、それどころか真理条件意味論者の代表者なのだった。—— このことからすでに、次のような予感がむくむくと湧いてくる：ダメットによるフレーゲ解釈と並行的にフッサールの志向性理論を解釈することの結論が、検証主義的／反実在論的意味論になるはずがないのではないか？ そして私は以下で、こうした予感は根拠のないものではない、と論じたい。

まず逆に、『志向性の哲学』における富山氏の叙述（特に第三章第六節）のうちに、ダメット的意味での検証主義的意味論を少なくとも連想させるものがあるという点の確認から始めよう：表現の Sinn とは一般に、その Bedeutung が与えられる仕方である、というフレーゲの有名な主張は、ダメットの解釈によれば次のように理解され

る : 表現の Sinn（これがフッサール的「意味」に重ねられることになる）は、その意味論的値を決定する手段である（例えば 159 頁を参照)。さて、名辞の意味論的値はその指示対象だから、名辞の Sinn はその指示対象の「探し方」である。—— ここまでは、『志向性の哲学』で実際に見出される説明だ ; 富山 2023b の表現を借りて、こうした説明を「手続き論的」説明と呼ぶことにしよう。さて、『志向性の哲学』で取り上げられているのは（私が見る限り）もっぱら名辞の Sinn の手続き論的説明であるが、富山氏の検証主義的意味論／ダメット的反実在論への共感について知っている人ならば、これにさらに次のような議論を付け加えてしまうのはごく自然なことだと思われる。—— また、言明の意味論的値はその真理値であるから、言明の Sinn はその真理値を我々が決定する仕方である。そして、ある言明の真理値を我々が決定するにあたっては検証ないし反証が必要だから、言明の Sinn はその検証ないし反証条件である、ということになる。こうして、フレーゲの Sinn の理論から検証主義的意味論が導かれた！

こうした議論はうまくいかないと私は思う（これについては後述する)。ただ、私がより興味を惹かれたのは次のことだった : 当該箇所での富山氏の手続き論的説明は、なぜうまくいっているように見えるのだろうか？ —— 名辞の Sinn を「探し方」「見つけ出す手段」として性格づけて、それでもって実在しない志向的対象の問題にも見通しのよい解決を与えるというのは、さすがに見事！と私も感じた説明だった。それに何か問題があったとでもいうのだろうか？

ここで有益なのは、ダメットの次のような指摘に注目することである : 決定可能言明に関しては、実在論と反実在論の相違は表面化しない[4]。その上で『志向性の哲学』第三章第六節を見返すと、そこで扱われている例の多くは、「探し方」ないし「見つけ方の手続き」に従えばその指示対象が見つかるか否かが明らかな名辞であることに気づく ; それらは自然な仕方で決定可能言明を構成する。そして、そうした名辞に限って言うならば、その Sinn はその指示対象の「探し方」であり、それを用いた（決定可能）言明の Sinn はその真理値を我々が決定する仕方、すなわちそれを検証ないし反証する仕方だ、と言っても問題ない。例えば、「最小の完全数」の指示対象（すなわち自然数 6）が決まる仕方を、《完全数判定[5]を小さなものから順に自然数にかけてみろ ; 最初に見つかるのがそれだ》という探し方によって説明することは、真理条

4. 例えば次を参照 :「したがって、[実在論と反実在論]間の論争は、ある与えられた言明を支持する証拠も反証する証拠も存在しないかもしれないことを、双方が認めるような言明のクラスに関してのみ、もち上がる。」（ダメット 1963, 110-111 頁）

5. この判定手続きの詳細は 162 頁を参照。

件意味論者にとっても無害である。こうした手続き論的説明を、彼らはすぐに次のような非手続き論的説明に読み替える：「最小の完全数」の指示対象は、それが、《完全数である》という性質を持ち、かつ《（その中で）最も小さい》という性質を持つ、ということによって決まる。この（非手続き論的な）説明には、「探し方」（といった認識的要件）が登場しない、ということに注意されたい；「…という性質」は、自然数それ自体が持ったり持たなかったりする性質であり、それによって、名辞の指示対象は一意的に決まる（我々がそれを「決定する」のではなく）[6]。—— どちらの説明が正しい／より適切なのか、決断する必要はここではない。ダメットが言うように、決定可能言明に関してならば、どちらの説明をとっても実質的な違いはない。

決定不可能言明を作るような名辞に関してはそう簡単にはいかなくなる。こうした名辞の例として第三章第六節で論じられるのは、「奇数の完全数であるような最小の自然数」（161-164 頁）である。こうした数が存在するか否かは未解決問題なのだが、我々はこの表現を理解することはできる。その理解についての手続き論的説明は次のようになる：《完全数判定を小さなものから順に奇数にかけてみろ；最初に見つかるのがそれだ》。件の表現を理解しているとは、このような「手続き、手順、探索方法」（164 頁）を知っているということにほかならない。—— この手続き論的説明も実際うまくいっているように見える。

問題が出てくるのは、この表現が決定不可能言明を作ってしまう場合だ[7]。言明「奇数の完全数であるような自然数が存在する」の Sinn は何か？ 上述のような手続きを実行して、当たり判定が出る、ということだ。OK。ならば、「奇数の完全数であるような自然数は存在しない」の Sinn は？ 上のような手続きを続けて、当たり判定が出ないことか？ —— こう答えてもかまわないのだが（それは可能な答えではある）、その際の問題は、その答えを選択した場合、検証主義的意味論からは決定的に離反することになるということだ。我々有限的存在者は、自然数のすべてに関して件の手続

6. これはダメットの見解でもある。例えば次の箇所を参照：「[実在論／真理条件意味論によれば、係争クラスのある]言明の意味を知るとは、その言明が真であるとはどういうことであるかを知ることである。そのような知識は、始めは、その言明が真であることの証拠として何が含まれるかを学ぶことから引き出されるかもしれない。だが、その場合でもわれわれは、そのような証拠が欠けているときでもその言明は真である、ということが考えられるような仕方で、そうするのである。」（ダメット 1963, 110 頁；ちなみに、これに、上の注 4 で引用された箇所が続く。）

7. 第三章第六節での富山氏の説明がうまくいっているように見えることの少なくとも一因は、そこでは決定不可能言明の Sinn が取り上げられなかったからだ、というのが私の見立てである。

きを行なうわけにはいかない。したがって、もし永遠に当たり判定が出ないにしても、そのことを我々が知りうる地点に立つことはない。検証主義的意味論を固持せんとするならば、件の言明はむしろ次のように理解されねばならないだろう：「奇数の完全数であるような最小の自然数は存在しない」ということについての（上述の手続きのような枚挙的確認とは異なる）一般的証明が得られる。

どちらの説明がよりよい／適切なのかは、私がここで問題にしたいことではない。重要なのは、名辞の Sinn についての富山氏の手続き論的説明そのもののうちには、フッサールの志向性理論がどちらの説明をとるか（あるいはとるべきか）を決定するような要素は何もない、ということだ。これは、『志向性の哲学』における富山氏の考察自体は、とりたてて検証主義的意味論にコミットするものではない、ということを意味する；それはむしろ、（少なくとも論証内在的に見られる限り）真理条件意味論 vs.検証主義的意味論の対立に対して中立なのだ。―― これは、『志向性の哲学』の当該箇所における富山氏の説明に対する批判にはならないだろうが、富山氏自身の自己理解にはそれなりの変更を迫るものになるかもしれない。

第 3 節　検証主義的真理観と《「対象そのもの」への志向》

本節で検討の対象になるのは、『志向性の哲学』でたびたび強調される、《フッサールの志向性理論は「対象そのもの」に関わる》（例えば 242 頁を参照）という論点である。以下で私は次のように論じたい：この論点（あるいは、これについての『志向性の哲学』における富山氏の説明）は、とりたてて検証主義的真理観にコミットするものではないばかりか、むしろ検証独立的真理観／ダメット的意味での実在論により親和的ですらある。

まずもって、《「対象そのもの」への志向》という論点と検証主義的真理観の相性は悪そうだ、ということは容易に予想される：検証主義的真理観にはさまざまな具体化の仕方があるが、それはいずれにせよ（私がはじめの用語解説で指摘したように）、観念論的存在論を伴わざるを得ない。そして、そうした観念論的存在論は、《対象は我々が認識しうる限りでのみ存在する》とか、《対象は我々の認識による構成物／措定物である》といった含意を持たざるを得ない。しかしながら、そうした認識依存的なものは、「対象そのもの」と呼ばれるに値するものとは程遠いのではないか？

まず、こうした疑念の解決法のうち、私見では著しく魅力を欠くと思われるものを挙げておこう：フッサールの志向性理論は、「対象そのもの」ということの意味の変

更を提案する。「対象そのもの」とは我々の認識（ないし志向性）から独立に存在しているようなものではなく、認識される限りで存在するようなものなのである。こうした意味の変更によれば、《「対象そのもの」への志向》ということは検証主義的真理観とも、その帰結としての観念論的存在論にも容易に整合し得るものとなる。――むしろ、「対象そのもの」のこうした意味の変更によってはじめて、「対象を志向する」ということがそもそも説明可能になる！

･･･自分で書いていていささかうんざりしてきたのだが、これはもう 240 年前から鳴り響いている懐メロであって、私としてはかなり食傷気味だ[8]。こうした論法の最大の問題点は、まともな実在論者なら、こうして割引して理解されたものを「対象そのもの」だと認めることは決してないだろう、ということだ。

『志向性の哲学』には、ひょっとしたら富山氏がこうした論法に与しているのではないか、と解せなくもない箇所がないわけではない（例えば 238-240 頁）。しかし私が見るところ、富山氏にはその必要はない。というのも、『志向性の哲学』のうちには、上のような割引をまったく必要としない、そして頑強な実在論者ですら納得させられそうな、《「対象そのもの」への志向》の説明のための十分なマテリアルが見い出されるからだ。―― 問題は、その説明に従えば、フッサール志向性理論は検証主義的真理観、さらにはダメット的反実在論から決定的に離反することになる、ということである。

その理由の説明も含め、以下、富山氏自身が扱った三つの例と、さらにダメ押しに私自身が作った一つの例を取り上げ、それがむしろ検証独立的真理観／（ダメット的意味での）実在論にこそ親和的だ、ということを示していきたい。―― なお、以下の記述では、《「対象そのもの」への志向》についての富山氏自身の説明から、それを敷衍して私が付け加えた議論（「実在論的付け加え」）への移行を明示するために、「／／」を用いることにする。

『志向性の哲学』の中で私の最もお気に入りな例は、「**早く原稿を書き終えてビールが飲みたい**」（240 頁）である。実際、私は今心底ビールを飲みたいのだが、私が欲しいのは「心のなかのビールのイメージ」や「ビールの表象」でもなく、「本物のビール」だ。／／「本物のビール」とはどういうことか？ ここでの叙述で、富山氏は特殊な観念論的存在論へのコミットメントを表明していないから、この説明は常識

8. みなさんすでにおわかりだろうが、これは『純粋理性批判』第一版「第四パラロギスムス」におけるカントの次の議論のパロディである：超越論的実在論の想定のもとでは経験的観念論は不可避である；超越論的観念論によってのみ、経験的実在論が可能となる。

実在論のもとで理解されても仕方ないし、実際ほとんどの読者もそう解しただろう。だとすれば、「本物のビール」とは、私の認識ないし志向性から独立にそれ自体で存在しているところのビールだ、ということになるはずだ。

非存在対象の例である「**惑星ヴァルカン**」についての富山氏の説明（169-171 頁）も、見事なものだと私は思う：19 世紀末のとある天文学者が、ヴァルカンについていろいろ考えているとしよう。彼がこうした思考において志向しているのは、「ヴァルカンの心的イメージ」でもなければ「ヴァルカン」という語の意味でもない；志向されているのはあくまで、「惑星ヴァルカンそのもの、惑星の現物」である（170 頁）。ただ、ヴァルカンは存在しない。ならば、ヴァルカンの現物とは何か？ それは、名辞「ヴァルカン」の指示対象を「探すための手続き」（以下、「サーチ条件」と呼ぶことにしたい）を辿れば見出されるであろうものである。／／さらに私は次のように付け加える：我々志向者はサーチ条件を設定する。しかし、その条件のもと、該当するようなものが存在するか否かは、もっぱらそれ自体で存在している世界の側の都合による；志向されているのはすなわち、このような意味で、我々の認識や、それが我々によって志向されている、ということからすら独立に、それ自体で存在しているものである。

私による以上の「実在論的付け加え」がとりたてて実在論的であることを十分に納得できない方がいるとすれば、その一因は、「ビール」や「ヴァルカン」が、その指示対象の存在ないし非存在が決定済みな名辞であることによるのかもしれない。（前節で指摘されたように、こうしたものに関して、実在論と反実在論の相違は表面化しない。）ここで、第三の例として、決定不可能言明を作る名辞「**奇数の完全数であるような最小の自然数**」についての富山氏の説明（171-2 頁）を取り上げよう：私はそのようなものを探す；その探し方／サーチ条件はわかっている（前節参照）。私が見つけようとしているものは、「「奇数の完全数であるような最小の自然数」の現物そのもの」（171 頁）であり、「[そうしたものの]心的イメージ」や「それを探すための手続き」（*ibid.*）ではない。／／さて、そのような数の「現物そのもの」ということの含意の一部は次のことだろう：そのような数は、件の手続きを通じて発見されたりされなかったりする数であるが、そうした数があるかないかは、私がそのことを知りうるか、あるいはそれを私がそもそも思念するかにすら関わらず、それ自体で――いわばそれ自体で存在する自然数の側の都合で――確定している。これは、素朴であるがかなり強健な、数学的対象に関する実在論的想定／検証独立的真理観を表現するも

のである。

三つの例に対して私が上で行なった実在論的付け加えは、富山氏自身の説明の自然な敷衍——富山氏の説明をごく普通に読めば普通の読者が思いつくであろうもの——であるばかりか、それ自体説得的なものだと私は信ずる。とはいえ（少なくとも）一点、富山氏が、上のような実在論的付け加えに反対するのではないかと予感させる記述が見つかる。それは、富山氏が、「「本物の対象」という正解が、我々の経験とは別に世界の側で勝手に決まっているわけではない」（238 頁；強調千葉）と述べるくだりである。これに続く箇所を見てみよう：

> 「もし、世界と我々の主観を共に俯瞰するような神の視点から、我々のあずかり知らぬところで勝手に「本物の対象」なるものが決められており、我々は自分の経験だけを頼りにその本物を何とか見つけようとする、というモデルで我々の認識を考えるなら、確かに本物の対象が経験とは無縁なところにとどまり続けることもあるだろう。／ しかし、我々にとっての「対象」とはそのようなものではない。･･･」（238-9 頁；強調千葉）

私が強調を付加した二箇所は、富山氏による反実在論的態度表明——例えば、奇数の完全数が存在するかしないかは、我々がそれを知りうるかということからまったく独立に確定している、という考えを拒否するもの——と見えなくもない。しかしながら、ここで富山氏が本当にそのように考えているのならば、なぜそのようなことになるのか私にはさっぱりわからない。というのも、上で検討された三つの例で見たように、富山氏自身の説明のうちにはそうした反実在論を要求するような要素はまったく見当たらないからだ。

（上の引用最後の）「しかし、我々にとっての「対象」とはそのようなものではない」ということの論拠として、それに続く箇所で挙げられているのは、大雑把にまとめれば、《対象とは、我々が設定する手続きによって探索されるものであるからだ》ということである。この論拠から何か反実在論的な帰結が導かれると富山氏が考えるのならば、私はそれに反対する：サーチ条件を設定するのはもちろん我々志向者である。しかし、このことは、上で私が示したように、《そのようなサーチ条件を満たすものが実際に存在するかしないかは、我々の認識／志向から独立に決まっている》と考えることとまったく両立可能である。

この点を強調するための最後のダメ押しとして、私自身が考案した例を紹介したい：**私は結婚相手を探す**。私の「サーチ条件」はまあ、みなさん適当にご想像いただきたい。さて、そうした条件を満たす女性はいるかもしれないし、いないのかもしれない。しかしいずれにせよ、私が探しているのは、そうした女性のイメージでもなければ、私による思念的構築物でもなく、実物の女性である。—— もちろん、サーチ条件を設定するのは私だ；なんなら、どんな厚かましいサーチ条件でも私は自由に設定できる。しかしこのことは、（もしそうした女性がいるとすれば）その女性の存在を、私の志向性（＝サーチ）に依存的なものとはしない。そうした女性はもちろん、私が件のサーチ条件で探しているということなどあずかり知らずに、彼女自身で存在するのだ。

以上の考察で、私は次の結論を導くに十分な議論を提示できたと思う：(1)《「対象そのもの」への志向》という論点についての『志向性の哲学』における富山氏の説明は、少なくともとりたてて検証主義的真理観／ダメット的反実在論にコミットするようなものではない。(2) それどころかそれは、フッサールの志向性理論をむしろ実在論的に展開するための、十分なマテリアルを提供している、というのが私の見立てである；そしてこのことはそれほど無駄な指摘でもないだろう、と私は信ずる。

第 4 節　『志向性の哲学』と「物自体」

対象が「我々の経験とは別に世界の側で勝手に決まっている」／「我々のあずかり知らぬところで勝手に「本物の対象」なるものが決められ[ている]」、という考えに富山氏が抵抗を感じた一つの理由は、ひょっとすると、こうしたことを認めれば、カントの「物自体」のような珍妙な想定を引きうけなければいけなくなる、と考えたからなのかもしれない。事実、カント的意味での「物自体」の想定は、『志向性の哲学』ではかなり批判的に語られている。（例えば、フッサールの志向性理論は「我々の経験から切りはなされた「物自体の世界」の可能性を認めない」（251 頁）という指摘を参照。）

これに対し、私はまず、カント的意味での「物自体」の想定は——しばしば考えられているほど——珍妙でもおどろおどろしいものでもないことを示したい。次に、カント的意味での「物自体」が正しく理解されるならば、富山氏はいずれにせよ、物自体のようなものを認めざるを得なくなるのではないか、と示唆する。

さて、誤解されやすい点なので強調に値するが、『純粋理性批判』において、物自体とは、まずもって《経験を超絶した、絶対的にアクセス不可能なもの》《超感性的な超越者》といったことによって定義されるものではない。「物自体」ということの定義的意味は、《我々の経験／認識から独立に存在するもの、そしてそうしたものがそれ自体であるあり方》ということである。だから、「超越論的実在論者は、我々が経験しているのは物自体だと考える」と言えるわけだ。(《超感性的な超越者》だったら、それを我々が認識するなんて誰も考えませんよね？)

物自体についてのこの基本的な理解の上で、カントの超越論的観念論には大きく分けて二つの解釈がある。**一つは**より（ダメット的意味での）実在論的なもので、次のように主張する：経験的認識において我々は実際、（上の意味での）物自体を認識する（この想定が、この解釈方針を「実在論的」にする要点だ）；ただ、我々が認識するのは、それがそれ自体であるようなあり方ではなく、それが我々に現象するあり方（「現象的側面」）にすぎない[9]。**もう一つは**明瞭に反実在論的／観念論的なもので、経験の対象の存在そのものを認識依存的とみなす。それによれば、現象と物自体の区別は、認識依存的に存在するものと、認識独立的に存在するものの区別である[10]。

どちらの解釈がカント解釈として正しいのか、ということをここで論じるつもりは私にはない。私がここでまず示したいのは、どちらの解釈をとろうが物自体の想定はさして珍妙なものではないということだ：**前者の**（実在論的）解釈によれば、経験の対象はそもそも物自体なのだから、その想定には何の問題もない。説明が必要なのはむしろ、それに加えてなぜ「現象」（より正確に言えば現象的側面）なるものの想定が必要となるのか、ということだ。そしてそれは、(『純粋理性批判』の基本テーゼの一つである）空間・時間の超越論的観念性による。これにより、経験の対象が持つ空間・時間的あり方は、物がそれ自体であるあり方とは別のあり方だということになる。こうして、現象的側面が追加的に設定される。

後者の（観念論的）解釈では、事情は若干違ってくる。それは物自体を現象とは異なるものとみなすので、我々が実際に認識できている現象に加えて、物自体（すなわ

9. この解釈は、現象と物自体の区別を、認識独立的に存在する物が持つ二つの側面の違いとして説明するので、カント解釈史では「二側面解釈」と呼ばれてきた。

10. 認識依存的に存在するものと認識独立的に存在するものが同一なものであることはありえないから、この解釈では、現象と物自体は二つの異なるものと想定されることになる；このことからこの解釈パターンは、カント解釈史では「二世界解釈」と呼ばれてきた。二世界解釈と二側面解釈の詳細については千葉 2014b を参照。

ち我々の認識から独立にそれ自体で存在するようなもの）もまた実在するのかが問題となる。しかし、こうした理論的状況において物自体をともかくも想定することは可能であり（我々はそうしたことを少なくとも思考できる！）、ここで詳論はできないが、そうしたものの存在主張すらなしうる[11]。—— いずれにせよ、カント哲学の枠内における「物自体」の想定は（ヤコービが誇張気味に描写したのとは異なり）何か珍妙な存在領域を設定する、ということからは程遠いものだ、というのはおわかりいただけただろう。

さて、その上で、『志向性の哲学』でフッサールに帰される立場とカントの超越論的実在論／超越論的観念論の区別の関係について考えてみよう。富山氏があえて検証主義的真理観にこだわろうとするならば、フッサールの立場は確かに、**後者の**強い観念論的解釈の意味での超越論的観念論に相当することになる；ただしその場合、認識独立的なものとしての物自体の想定なしで済ませられるのかは定かではない[12]。それに対し、前節で私が推奨したように、富山氏の立場を実在論的に展開するならば、それから帰結する立場は観念論的解釈の意味においてのみならず、**前者の**実在論的解釈の意味での超越論的観念論でもありえない、ということになる。というのも、『志向性の哲学』でフッサールに帰される立場は、時空の超越論的観念性（に類する主張）を含まないであろうから（例えば 251-2 頁を参照）、そうした立場は、物自体に加えて現象的側面をも設定する動機がそもそもなくなるからだ。その場合、我々は「対象それ自体」を認識する、とカント的意味でも言えることになる；これは、超越論的実在論の立場にほかならない。—— いずれにせよ、富山氏は、カント的意味での「物自体」を認めざるを得なくなるのではないか、と私には思われる。

以上の私の考察からの結論は、一見するともっぱら否定的なものであった。少なくとも『志向性の哲学』で展開されている実質的議論に即する限り、それはとりたてて検証主義的意味論にも検証主義的真理観にも、なんなら超越論的観念論にすらコミットしない、というのだから。—— しかし私はこの結論のうちに、『志向性の哲学』の別の角度からの積極的意義を垣間見る。私の議論が正しいとすれば、富山氏は（おそらく彼自身の意図には反することになるかもしれないが）、フッサールの志向性の

---

11. Chiba 2012, sec. 8.2（簡略版は千葉 2015）を参照。—— なお、そこでの私の議論とほぼ同趣旨と思われる議論を私は植村 2017（特に 146-7 頁）に見出した。富山氏がこの議論をフッサール的に許容可能だとみなすならば、富山氏がカント的「物自体」を拒否する理由はますますなくなることだろう。

12. 直前の注を参照。

理論を（ダメット的意味での）実在論的に展開する、非常に魅了的な可能性を拓いた、ということになろう。また、『志向性の哲学』における議論が、もしダメットの「表出論証」をクリアできるような仕方で展開されている（あるいはそのようにさらに洗練され得る）ならば、それは、表出論証をクリアし得る実在論的意味論を具体化することにより、有効なダメット批判を提起することにすら連なり得る。

以上の議論に面して、富山氏が反実在論者から実在論者に転向する気になるかどうか、私にはわからない。いずれにせよ、『志向性の哲学』は、現代の実在論論争一般に対する非常に興味深い問題提起を行なうものである、ということの指摘によって、本論考を閉じさせていただくことにしたい[13]。

参照文献

Chiba, Kiyoshi 2012: *Kants Ontologie der raumzeitlichen Wirklichkeit*, Walter de Gruyter.

千葉清史 2014a：「直観主義数学の非時間的真理概念」,『東北哲学会年報』第 30 号, 1-14 頁.〔オンライン閲覧可〕

― 2014b：「二世界解釈と二側面解釈：そもそも何が問題だったのか？」, 京大・西洋近世哲学史懇話会(編),『近世哲学研究』第 18 号, 1-35 頁.〔オンライン閲覧可〕

― 2015：「「物自体は存在するか」という伝統的な問題の解決によせて」,『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第 12 号, 15-26 頁.〔オンライン閲覧可〕

マイケル・ダメット 1963:「実在論」,『真理という謎』, 勁草書房, 1986 年, 93-127 頁.

富山豊 2017：「第 4 章 志向性」, 植村／八重樫／吉川 2017, 97-130 頁.

― 2023a：『フッサール：志向性の哲学』, 青土社.

― 2023b：「自著紹介『フッサール：志向性の哲学』」,『フィルカル』Vol. 8, No.2.

植村玄輝／八重樫徹／吉川孝(編著) 2017：『ワードマップ 現代現象学：経験から始める哲学入門』, 新曜社.

植村玄輝 2017：「第 5 章 存在」, 植村／八重樫／吉川 2017, 137-166 頁.

13. 本論考の仕上げに際し、中山弘太郎氏より貴重なコメントをいただいた。ここに感謝申し上げたい。また、本研究は JSPS 科研費：JP 23K00018 の助成を受けたものである。